［総　説］

# 外来看護師の児童虐待に対する意識に関連する文献検討

網野　真由美

北海道医療大学大学院看護福祉学研究科修士課程

**キーワード**
児童虐待，看護，外来

## Ⅰ．緒言

子ども虐待とは，保護者がその監護する児童に対して行う暴力，強要，無視，脅かし等の行為を示し，身体的虐待，性的虐待，ネグレクト，心理的虐待の４つに分類される．諸外国では，子どもに対する大人の不適切な関わりを意味する「マルトリートメントmaltreatment」という概念が一般化しており，虐待より広い概念である（日本看護協会，2002）．2015年度に全国の児童相談所で18歳未満の子どもへの虐待（以下，児童虐待とする）相談に対応した件数は，前年度から14,000件以上増え，103,260件で過去最多の状況である（厚生労働省，2016）．この数値は統計を始めてから25年連続で増加している．また，深刻な児童虐待事件は後を絶たず，依然として社会全体で取り組むべき重要な課題となっている．

これに対し，厚生労働省は，児童虐待の防止に向け，１．児童虐待の発生予防，２．早期発見・早期対応，３．子どもの保護・支援，保護者支援の取り組みを推進している．それにも関わらず，医療機関からの相談件数は全体の３％であり（厚生労働省，2015年速報値），医療機関に勤務する看護師は，子どもが医学的な診断や加療を必要とするほど重篤な事例だけではなく，虐待が深刻化する前の早期発見・早期対応に積極的に取り組む必要がある．

特に外来看護師は，日常業務の中で，社会との接点の少ない未就園・未就学の子ども連れの親子と身近に関わることのできる立場にある．子どもの体調不良，軽度の外傷，ワクチン接種などで気軽に親子が受診する機会のある外来では，児童虐待が隠されている場合があり，児童虐待の早期発見の場として重要である．日本看護協会（2002）では，外来看護師は，児童虐待の可能性や保護者の育児不安を見極め，支援することで，児童虐待防止に対する役割を担うことができると示している．このような役割を担うためにも，外来看護師が児童虐待に対して高い意識をもつことは，児童虐待予防の第一歩になりうる．そこで本研究では，子どもに関わる外来看護師の児童虐待に対する意識について書かれた文献を概観することにより，今後の外来看護師の児童虐待に対する意識を高め，児童虐待への対応を促進するための示唆を得ることとした．

＜連絡先＞
網野　真由美
北海道医療大学大学院看護福祉学研究科修士課程
E-mail：mayuami0424@gmail.com

## Ⅱ．目的

医療機関の外来に勤務する看護師の児童虐待に対する意識について，先行研究の知見から明らかにすること．

## Ⅲ．用語の定義

本研究における「児童虐待に対する意識」とは，児童虐待に対する関心・認識・気づき・知識・思考・困難感のこととする．

## Ⅳ．方法

### １．文献の選定

医学中央雑誌Web版Ver.5を利用し文献検索した．検索に用いたキーワードを「児童虐待」・「看護」・「外来」とし，全期間を対象として，会議録を除く原著論文で検索したところ，1996年～2016年６月までに発刊された論文が88件検索された．そのうち，１）研究の結果に看護師の児童虐待に対する意識について記載されているもの，２）外来看護師を研究の対象者に含んでいるもの，３）目的・方法・結果・結論に相当する記載があるもの，の３つの基準を満たす９文献を選んだ．さらにそれらの文献の引用文献の中から外来看護師の児童虐待に対する意識について書かれている３文献を追加し，計12文献を分析対象とした．

### ２．分析方法

分析対象とした12文献を，掲載年，研究デザイン，研究の規模および研究対象者の所属先で分類し，概観した．さらにこれらの文献で明らかにされていた結果をもとに，外来看護師の児童虐待に対する意識について言及している内容を抽出した．その抽出した内容を１）外来看護師の虐待に対する意識，２）虐待の意識

の高さに関連する要因，３）被虐待児への対応に対する意識，４）介入研究による意識の変化の４つに分類し，さらに，１）外来看護師の虐待に対する意識を⑴関心，⑵気づきの視点，⑶思考，⑷知識の４つに分類し，検討した．

## Ⅴ．結果

### １．対象文献の概要

#### １）文献数の経年的推移

対象とした12文献の研究概要を表１に，文献数の経年的推移を表２に表す．2004年以前の文献はなく，12件中10件が2010年以降のものであり，2013年には最も多い４件が発刊されていた．

#### ２）研究デザイン

調査方法は，質的研究が２件で，それ以外の10件は，すべて量的研究であった．

#### ３）研究の規模

研究の規模について対象とした施設数と地域でみたところ，把握できた研究は10件であった．１施設のみを対象とした研究は５件で最も多かった．13施設および33施設を対象とした研究は各１件あり，いずれも１つの県内で行われているものであった．70施設以上を対象とした研究３件は，全国規模で行われているものであった．なお，70施設以上の３件は，同じ著者による研究であった．

#### ４）研究対象者の所属先

研究対象者の所属先は，小児外来１件，救急外来４件，両方含むもの７件であり，救急外来の看護師を対象とするものが多かった．

### ２．児童虐待に対する看護師の意識

看護師の意識に言及された内容を４つに分類し，図１に示した．なお，1つの文献で複数の内容が明らかにされている場合もあったため，延べ件数で表記した．４つに分類した文献を掲載年別でみたところ，特徴的な傾向はみられなかった．外来看護師の虐待に対する意識について書かれている文献が10件で最も多かった．以下，これらの内容を概観する．

#### １）外来看護師の児童虐待に対する意識

外来看護師の児童虐待に対する意識について書かれていた文献10件をさらに，⑴関心，⑵気づく視点，⑶思考，⑷知識の４つの内容に分けて概観する．

##### ⑴　外来看護師の虐待に対する関心

外来看護師の虐待に対する関心について書かれていた文献は５件であった（文献番号１，３，６，10，12）．児童虐待に対する関心がある看護師の割合を調べた結果，石原・高橋・小村（2015）は79.1％，松山・赤松・天野（2014）は93.6％，石原・鎌田（2013）は96％，上野・長尾（2010）は82.5％，山本靖・藤井・丸山・小西・鈴木・岡崎・山本和・瀬戸・毛利・奥村・渕上（2004）は94.1％であることを明らかにした．これらの文献における対象者は，外来看護師だけのものはなかったため，病棟を含む看護師全体の 約８～９割が児童虐待に関心があることが明らかになった．

山本他（2004）は，67.8％の看護師が児童虐待を身近な問題として捉え，関心をもっているが，積極的に関わっていきたいとする看護師は18.7％に過ぎないことを明らかにした．また，身近な問題として関心がない看護師は5.3％で，その理由は身近に問題とするケースがないからであった．上野・長尾（2010）の調査においても，74.6％の看護師が身近な問題として捉え，71.4％の看護師は，自身が児童虐待を発見するのに適切な立場にあると認識しているものの，積極的に関わっていきたいと考える看護師は36.5％，日々児童虐待を意識しているものは23.8％に過ぎなかった．また，石原他（2015）も，子どもに関わるときは常に児童虐待を意識している看護師は5.2％，時々意識するものは44.6％であり，子どもと関わるときに児童虐待をあまり意識していない看護師が約半数いることを明らかにした．さらに，看護師の所属先別で比較したところ，「児童虐待予防・対応について関心がある」と「子どもと関わるときに常に児童虐待を意識している」という設問に対して，小児病棟の次に小児外来の看護師が「そう思う」と回答していたことを示した．つまり外来を含む看護師の多くは，児童虐待に対する関心があり，身近な問題として捉えているものの，日々虐待を念頭におき，自身が関わっていきたいという認識は不十分で，積極的に児童虐待に関わりをもてない現状が明らかになった．

##### ⑵　看護師が児童虐待に気づく視点

看護師が児童虐待に気づく視点について書かれた文献は７件であった（文献番号１，３，４，５，８，９，11）．複数の文献であげられていた看護師が児童虐待に気付く視点を図２に示した．これら全ての文献の調査項目において，子どもの様子から気づく視点と，親の様子から気づく視点の両方の視点が含まれていた．

子どもの様子から児童虐待に気づく視点として，最も多く調査項目にあげられていたのは，身体的外傷で，５文献（文献番号１，３，４，９，11）で示されていた．松山他（2014）は，けがやあざができている場合には100％の看護師が児童虐待と認識するものの，虐待と認識する状況・状態は個人差が大きいことを示した．荒井（2010）は，看護師に面接を行い，その結果を質的に分析し，看護師が児童虐待に気づく視点として「外傷がある子ども」というサブカテゴリを抽出した．さらに，鎌田・石原（2013a）は，子どもの身体に不審な外傷がある場合の看護師の重視度は80～90％とかなり高い割合であったことを明らかにし，看護師は，身体的虐待の観察を非常に重視していることを示した．他にも子どもの様子から児童虐待に気づく視点として，身体や衣類の不衛生，るい痩，発育・発達の

表１．外来看護師の児童虐待に対する意識の研究の概要

| 文献番号 | 文　献　名 | 著者名 | 掲載年 | 研究対象者数　所属先 | 研究の規模 | | 研究デザイン | 外来看護師の意識に関する結果 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | １）児童虐待に対する意識 | | | | ２）虐待の意識の高さに関連する要因 | ３）被虐待児への対応への意識 | ４）介入研究による意識の変化 |
| | | | | | 施設数 | 地　域 | | (1)関心 | (2)気付く視点 | (3)思考 | (4)知識 | | | |
| 1 | 児童虐待に対する看護師の意識調査 | 石原　香織<br>高橋恵美子<br>小村　智子 | 2015 | 小児外来，小児病棟，救急外来，救急病棟の看護師430名 | 13 | １県内 | 量的研究 | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | |
| 2 | 救急外来での虐待の早期発見に対する取り組み～看護師が虐待の視点を持ち関わるための工夫 | 加瀬多恵子<br>鳥潟　美花<br>日下喜久江 | 2014 | 救急外来の看護師の48件の事例検討 | 1 | １市内 | 量的研究 | | | | | ○ | | |
| 3 | Ａ病院の救急外来に勤務する看護師の児童虐待への認識の現状 | 松山　美鈴<br>赤松　直子<br>天野　宣子 | 2014 | 救急外来の看護師87名 | 1 | １市内 | 量的研究 | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | |
| 4 | 子ども虐待の予防的な視点に関する研究～子どもの親の言動に対する小児看護師の重視度とその影響要因 | 鎌田佳奈美<br>石原　あや | 2013 | 小児専門病院で子どもに関わる外来と病棟の看護師729名 | 76 | 全　国 | 量的研究 | | ○ | | | ○ | | |
| 5 | チェックリスト使用による救急外来看護師の子どもの虐待に対する「気づき」の変化 | 加藤　裕子 | 2013 | 救急外来の看護師33名 | 1 | １市内 | 量的研究 | | ○ | | | | | ○ |
| 6 | 子ども虐待の早期発見・予防的支援のために看護職が重視する子どもと家族の言動や状況 | 石原　あや<br>鎌田佳奈美 | 2013 | 小児病棟，小児外科病棟，児童精神病棟，救急病棟，ＮＩＣＵ，小児外来，救急外来の看護師424名 | 72 | 全　国 | 量的研究 | ○ | | | | ○ | ○ | |
| 7 | 子ども虐待の予防に向けた支援に対する看護師の困難感 | 鎌田佳奈美<br>石原　あや | 2013 | 小児病棟，小児外科病棟，児童精神病棟，救急病棟，ＮＩＣＵ，小児外来，救急外来の看護師320名 | 76 | 全　国 | 質的研究 | | | | | | ○ | |
| 8 | 救急外来におけるネグレクトへの認識～虐待認識状況の把握・ネグレクトに関する共通理解を目指して | 長谷川聡美<br>石毛　香織 | 2012 | 救急外来の看護師19名 | 1 | １市内 | 量的研究 | | ○ | | | ○ | | ○ |
| 9 | 小児科外来看護師が虐待にいたる恐れのある家族に気づく視点 | 荒井　葉子 | 2010 | 小児科診療所の経験５年以上の看護師２名 | 1 | １市内 | 質的研究 | | ○ | | | | | |
| 10 | 看護師の児童虐待認識に関する研究～虐待発見に必要な対策～ | 上野加央里<br>長尾　光城 | 2010 | 588床の小児科外来，小児病棟，整形外科外来，病棟，救急センター，病棟の看護師と199床の救急外来の看護師127名 | 2 | 不　明 | 量的研究 | ○ | | ○ | | ○ | | |
| 11 | 虐待への看護師の認識と対応に関する研究 | 鈴木ひとみ<br>畑下　博世<br>他 | 2008 | 総合病院の看護師2047名 | 不　明 | 不　明 | 量的研究 | | ○ | | | ○ | ○ | |
| 12 | 児童虐待に対する看護職の認識と支援の現状 | 山本　靖子<br>藤井　弘子<br>他 | 2004 | 小児が入院する病棟と産科病棟，小児の受診がある外来の看護師802名 | 33 | １県内 | 量的研究 | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | |

表２．文献数の経年的推移

| 掲載年 | 2004 | 2008 | 2010 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 文献数 | 1 | 1 | 2 | 1 | 4 | 2 | 1 |

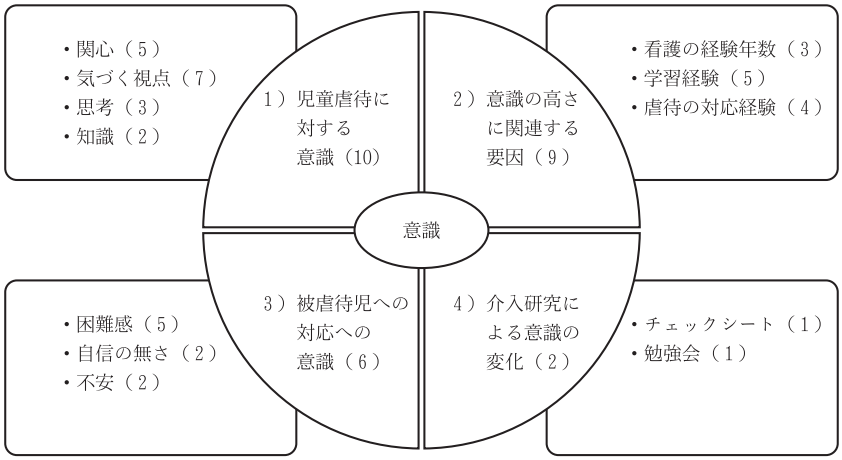


図１．外来看護師の児童虐待に対する意識　（　）内に延べ文献件数を示した

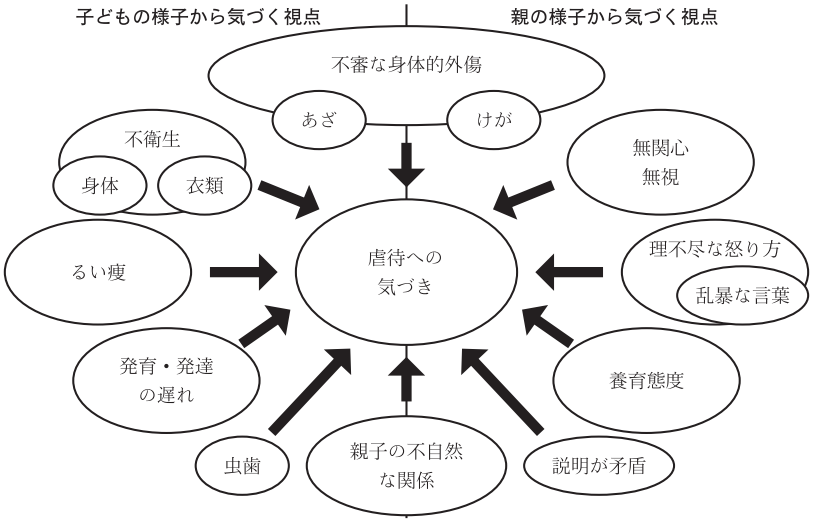


図２．複数の文献であげられていた看護師が児童虐待に気づく視点

遅れ，虫歯の多さ，極度のおむつかぶれなどがあげられ，これら子どもの外見で気づくものが６文献（文献番号１，３，４，８，９，11）で示されていた．また，長谷川・石毛（2012）は，看護師がネグレクトに気づく視点に焦点をあて調査したところ，食事を与えない，十分な栄養を与えないなどの栄養ネグレクトの認識が高く，半数を占めたことを明らかにした．

次に，親の様子から看護師が児童虐待に気づく視点として明らかにされていたのは，子どもに対する無視・無関心が３文献（文献番号３，８，９），理不尽な怒り方・乱暴な言葉が３文献（文献番号３，９，11）であった．他にも看護師が親の様子から気づく視点として，予防接種や必要な医療を受けさせない・受診時の説明が矛盾しているという項目が２文献（文献番号３，４）で示されていた．また，荒井（2010）は，孤立している親，完璧な育児を求める親，些細なことを気にする親をあげていた．

さらに，子どもと親の双方の様子から看護師が虐待に気づく視点として，石原他（2015）は，親子関係の不自然さをあげ，このような様子を見て74.3%の看護師が虐待を疑うという結果を示した．また，身体的外傷については，子どもだけではなく，母親自身のあざやけがなど家庭内暴力を連想させる様子に対する視点もあげられ，看護師が児童虐待に気づく視点は多岐にわたっていた．

長谷川・石毛（2012）は，児童虐待に気付く視点を，身体的症状や，不衛生，子どもを無視するなどの客観的に虐待と認識されやすい「見た目で判断しやすいも

の」と，受傷機転が家庭内の事故に関する誤飲や転落などの「虐待を意識しないとわからないもの」の2つに分類し，加藤（2013）は，明らかに虐待を疑うようなケースは気づきやすいが，育児困難や育児不安が強いケースは気づきにくいことを示した．

**⑶　虐待に対する看護師の思考**

虐待に対する看護師の思考について明記している文献は3件であった（文献番号1，10，12）．山本他（2004）は，74.4%の看護師が，児童虐待は誰にでも起こりうることだと認識しており，44.6%の看護師は，今後児童虐待に関わる機会が増えると感じていることを示した．また，上野・長尾（2010）の調査では，71.4%の看護師が児童虐待を発見するのに適切な立場にあると認識していた．

さらに，石原他（2015）の調査では，看護師の所属先別で比較し，「子どもと保護者の関係について不自然さがないか観察している」という項目で，小児外来の看護師が最も「そう思う」と回答し，「子どものフィジカルアセスメント時に全身観察をするようにしている」，「子どもの身体的・精神的症状から虐待のアセスメントができる」の2項目で，小児病棟の次に小児外来の看護師が「そう思う」と回答していた．そして，子どもに関わる看護ケアの中で児童虐待を見過ごしているかもしれないという意識は，小児外来の看護師が一番低かった．しかし，児童虐待の発見・通告できる技術があると回答した看護師は16.9%に過ぎず，その中で，救急外来の看護師の意識が一番高いことを示した．外来看護師の児童虐待への気づく視点はそれぞれにあるが，発見するための技術は足りないと感じていることを明らかにした．

**⑷　児童虐待の知識**

児童虐待の知識について調べた文献は，3件であった（文献番号1，3，12）．山本他（2004）は，8～9割の看護師が，児童虐待の発見・予防・対応に対する知識不足を感じていることを明らかにしており，石原他（2015）は，看護師の所属先別で比較し，小児外来看護師が，知識があると回答した割合が最も低いことを明らかにした．いっぽう，松山他（2014）は，児童虐待の分類の看護師の認識度を調査した結果，身体的虐待97.1%，性的虐待94.2%，ネグレクト89.9%，心理的虐待75.4%，マルトリートメント4.3%であった．マルトリートメントについて，介入が必要な虐待の一種であるという認識は低いことを明らかにした．

**2）児童虐待の意識の高さに関連する要因**

児童虐待の意識の高さに関連する要因について調べた文献は9件であった（1，2，3，4，6，8，10，11，12）．そのうち最も多かったのは，看護師の児童虐待についての学習経験や研修経験の5文献であった（文献番号1，3，8，10，11）．次に，看護師の児童虐待の援助経験が4文献（文献番号1，3，6，12）で，他には看護師や小児看護師経験の長さが3文献（文献番号3，4，6）に，チェックシートやチェックリストの存在が3文献（4，6，11）に示されていた．また，看護師の関心度も関連要因であることが示されていた（文献番号4）．

**3）被虐待児への対応に対する意識**

被虐待児への対応に対する意識について書かれた文献は6文献であった（文献番号1，3，6，7，11，12）．そのうち最も多かったのは，被虐待児，または家族の対応に対する困難感で，5文献であった（文献番号1，6，7，11，12）．他に看護師は，不安や疑問，自信のなさ，時間制限，罪悪感，疲弊感，知識不足，関係する機関との関わりの難しさ，などを感じていた．石原・鎌田（2013）の調査では，93.7%の看護師が虐待を疑われる家族への支援の困難さを感じており，鎌田・石原（2013b）は，児童虐待への対応について，多くの看護師が困難や戸惑いを感じ，手探りの状態で支援を行っている現状を明らかにした．そして，松山他（2014）は，88.4%の看護師が児童虐待への対応の必要性を感じているが，虐待症例に遭遇した場合，積極的に対応するとしたものは34.3%にとどまったことを示した．さらに，鎌田・石原（2013b）は，困難感の内容別に，家族の支援ニーズの見極め，家族への直接的な関わり，他機関・チーム間での協働，看護師自身の心身の負担，病院での関わりの限界の5つに分類し，その中で，家族への直接的な関わりに困難を感じているものが非常に多かったことを明らかにした．また，山本他（2004）は，23.9%の看護師は虐待を見逃してないか気にしており，12.9%の看護師は虐待を予防することは難しく，55.4%の看護師は，虐待に介入することは難しいことを示した．さらに，鈴木他（2008）は，被虐待児への看護師の対応において，医師・上司に相談19.7%，他機関へ相談3.6%，話をゆっくり聞く12.3%であったが，4.8%の看護師は何もしなかったことを明らかにし，理由に困難さと，看護介入ではどうにもならない難しさ，時間制限，援助機関・社会資源についての知識不足があることを明らかにした．また，虐待のスクリーニングに対して知る人は5.6%と極めて低く，実行している人は0.8%とさらに低い結果であり，虐待に対する対応の準備性が非常に低いことを明らかにした．

**4）介入研究による意識の変化**

介入研究による意識の変化について調べた文献は2件であった（文献番号5，8）．加藤（2013）は，救急外来を受診した子ども全員にチェックリストを使用し，救急外来看護師の児童虐待に対する気づきや意識の変化を調査した．結果，チェックリストの使用前後で，虐待の可能性を考えて診察に関わっていた看護師の割合は，70%から85%へ増加した．しかし，チェックリストの使用期間が短期間であったため，看護師の

児童虐待に対する気づきの変化までは明らかにされなかった．また，長谷川・石毛（2012）は，勉強会前後で看護師の児童虐待に対する関心度が84％から95％へ高くなり，さらに，救急外来における虐待発見の必要性について，必要と答えたものは勉強会前後で58％から95％と大幅に増え，勉強会の開催により虐待に対する認識を高められることを明らかにした．

## Ⅵ．考察

### 1．研究の動向と今後の課題

児童虐待に対する看護師の意識についての研究は，すべてが2004年以降のものであった．これは，2000年に児童虐待法が制定されたことで，虐待に対する認識が高まったことが影響していると考えられる．また，児童虐待相談件数は増加し続けているにも関わらず，看護師の意識についての研究数は増加していない．特に外来看護師の意識についての研究は少ない．看護師の児童虐待に対する意識を高めることが，児童虐待予防に繋がると考えられるものの，児童虐待の予防のための体制整備が整っている総合病院などの看護師を対象とした研究はされているが，クリニックを含む外来看護師だけに焦点をあてた児童虐待に対する意識の研究は１件のみであった．これは，チームとして児童虐待に対応することが優先され，チームとしての体制整備に関心が向いていて，看護師個々の児童虐待に対する意識を高めることが児童虐待予防に繋がるにも関わらず，それに対する関心が少ない現状を反映していると思われる．小児外来は，子どもの身体問題をとおして身近に子育て相談が行える場所であり，小児外来の看護師は，日常の診察の中で，子どもの身体や親子の様子を観察することができる立場にいる．そのため，小児外来の看護師の児童虐待への気づきは大事であり，今後，病棟のみならず，小児外来の看護師の児童虐待に対する意識についての実態をさらに明らかにする必要がある．

研究方法を分類した結果，量的研究がほとんどであり，実態調査をすることで全容をおさえようとする目的が考えられる．質的研究は，児童虐待に気づく視点と対応への困惑感について書かれた２文献と少ない．今後さらに外来看護師の児童虐待に対する意識について，質的研究により，様々な側面から深く探求していくことが望ましい．

また研究対象は，１施設の救急外来や，１県内の病棟を含む複数施設を対象としたものが多く，外来看護師のみ対象としたものや，全国規模の研究は少なかった．今後は，１施設にとどまらず，地域差の把握も含め，全国規模の調査が望まれる．

### 2．外来看護師の児童虐待に対する意識を高めるための方策

親子の日常の場面に遭遇する機会をもっている看護師は，子どもの言動，親子の関係性，親の養育態度，家族背景を把握しやすい立場にあり，虐待予防に向け，家族のニーズを把握し支援を提供できる専門職であり，看護師が子ども虐待の予防に積極的に取り組む意義は大きい（鎌田・石原，2013b）．特に外来看護師は，子どもの体調不良，軽いけが，予防接種などで，親子が気軽に日常的に訪れる外来において身近に関われる専門職である．外来看護師が児童虐待に対する意識をもつことは，虐待予防の重要な手がかりとなる．しかし，多くの外来看護師は，児童虐待に対する関心はあり，身近な問題として捉えているものの，日々虐待を念頭におき関わる認識は不十分で，積極的に児童虐待に関わりを持てない現状が明らかになった．その原因について，益田・浅田（2003）は，看護師の児童虐待に関する知識・認識不足，虐待対応システムの不備であることを明らかにした．また，大畑他（2010）は，児童虐待の発見は，看護師の知識と経験を踏まえた気づきから始まると述べている．さらに，鎌田・石原（2013b）も，児童虐待予防の支援における看護師の重要な役割は，支援を必要としている家族に気づく認識をもつことが，虐待に対する支援の出発点であると述べている．本研究においても，児童虐待に気づく視点に関する多数の先行研究があった．これらの研究において，多くの看護師が，親子の外見や親子関係の観察から，児童虐待に気づくと回答していたものの，その認識には個人差があることから，見た目だけでは気づくのが難しい児童虐待について，外来看護師が判断力を養うための学習の機会が必要である．

また，多くの看護師が，児童虐待を認知することに葛藤し，虐待を疑うことに躊躇しがちで，児童虐待に対する対応への困難感を抱えていることが明らかになった．このような困難感に対して，相談できる体制，勉強の機会，判断に困らないためのチェックリストの導入などの対策の整備が効果的であると考える．そして，看護師の経験年数が多いほど児童虐待に対する意識は高くなる傾向にあることから，特に経験年数の少ない看護師を対象とした勉強会・研修の機会を増やす必要があると考える．

今後，外来看護師の児童虐待に対する意識をさらに高めていくために，総合病院などの大規模な病院にとどまらず，児童虐待予防対策が整備されていないクリニックを含む全ての小児外来を対象に，組織全体で実効性のあるシステムを導入し，看護師が児童虐待予防に積極的に取り組める体制を整えていく必要がある．

## 引用文献

荒井葉子（2010）．小児科外来看護師が虐待にいたる恐れのある家族に気づく視点．キャリアと看護研究，1(1)，23-30.

長谷川聡美，石毛香織（2012）．救急外来におけるネグレクトへの認識～虐待認識状況の把握・ネグレクトに関する共通理解を目指して．旭中央病院医報，34，53-56.

石原あや，鎌田佳奈美（2013）．子ども虐待の早期発見・予防的支援のために看護職が重視する子どもと家族の言動や状況～看護職の背景要因による比較．兵庫医療大学紀要，1(1)，69-78.

石原香織，高橋恵美子，小村智子（2015）．児童虐待に対する看護師の意識調査．日本小児看護学会誌，24(3)，10-17.

鎌田佳奈美，石原あや（2013a）．子ども虐待の予防的な視点に関する研究～子どもの親の言動に対する小児看護師の重視度とその影響要因．小児保健研究，72(6)，834-842.

鎌田佳奈美，石原あや（2013b）．子ども虐待の予防に向けた支援に対する看護師の困難感．臨床教育学研究，19，13-24.

加瀬多恵子，鳥潟美花，日下喜久江（2014）．救急外来での虐待の早期発見に対する取り組み～看護師が虐待の視点を持ち関わるための工夫．旭中央病院医報，36，49-51.

加藤裕子（2013）．チェックリスト使用による救急外来看護師の子どもの虐待に対する「気づき」の変化．仙台市立病院医学雑誌，33，67-72.

厚生労働省（2016年12月21日）．児童相談所での児童虐待相談対応件数．厚生労働省H27年速報値．http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132381.html.

益田早苗，浅田　豊（2003）．関係機関職員の子ども虐待に対する意識に関する一考察―青森県における調査をもとにして―．子どもの虐待とネグレクト，5(1)，157-165

松山美鈴，赤松直子，天野宣子（2014）．A病院の救急外来に勤務する看護師の児童虐待への認識の現状．横浜市立市民病院看護部看護研究収録平成25年度，38-43.

日本看護協会（2002）．看護職による子どもの虐待防止と早期発見・支援に関する指針．日本看護協会出版会.

大畑紀恵，渡辺芳江，朝野春美（2010）．外来での被虐待児の発見とその対応．小児看護，33(10)，1405-1410.

鈴木ひとみ，畑下博世，羽畑正孝，マルティネス真喜子，玉村香代子，川井八重，辻岡芳美（2008）．虐待への看護師の認識と対応に関する研究．滋賀医科大学看護学ジャーナル，6(1)，67-72.

上野加央里，長尾光城（2010）．看護師の児童虐待認識に関する研究～虐待発見に必要な対策．川崎医療福祉学会誌，19(2)，379-385.

山本靖子，藤井弘子，丸山浩枝，小西真千子，鈴木樹里，岡崎美晴，…渕上恵子（2004）．児童虐待に対する看護職の認識と支援の現状．神戸市看護大学短期大学部紀要，23，85-93.

受付：2016年11月30日
受理：2017年２月３日